

読書通信



No. 175

① アンダークラス定着で日本も階級社会になったと喝破したのは橋本健二氏だが、中間層の消滅が日本のみならず世界を揺るがしていることを考えると、「階級」は固定的だと思わざるをえない。教育しだいで下の階級から上へ移動できるはずが、その教育がカネ次第とあつてままたまらないのだから事は深刻である。

橋玲『上級国民／下級国民』（小学館新書、85頁）は、大卒・非大卒、壮年・若年、男女の6グループに分類してそれぞれの感情、経済力、結婚などを調べている。すると非大卒男

なのだろうか。ジャロン・ラニア『今すぐソーシャルメディアのアカウントを削除すべき10の理由』（重紀書房、194頁）はソーシャルメディアの闇を徹底的に究明している。

ネット社会で個人情報を読み上げアルゴリズムによって金儲けを図るIT企業が批判の対象である。特にフェイスブックとグーグルがアカウントの顧客の行動を本人の気づかぬうちに「修正」していくことが追及される。主体的に情報を得て自ら考えることが対応策として提示されていて、これはネットに限らず重要だと感じさせられた。ちょっと過激だが、怖い世の中を道を開けないためには肝に銘じたい内容だ。

③ 「愛国」という名の亡霊が世界をさまよっている。日中韓も例外ではない。ヘイトも右翼

子には驚くほど冷酷な現実が待ち構えていることがわかった。経済力に乏しく女性にモテないので生涯独身の可能性が極めて高い。逆に大卒男子の一部は大いにモテて離婚―再婚を繰り返すので、非大卒男子の結婚機会を奪っていく。それほど単純かどうかは議論の余地があるだろうが、非大卒中心の引きこもりが500万人もいるかもと言われると、確かに深刻である。

日本社会の分断は現下の重大問題であり政治家や官僚にこそ読んでもらいたい本だが、どうやら庶民のほうが熱心に読んでいよう。欧米の混乱を理解するにも格好の書で、知的好奇心を大いに満足させてくれる。

② ネット犯罪やネット炎上が増え続け、一方、ネット販売は拡大一途でこの先、本当に大丈夫

も愛国と直結している。在日非難、沖縄差別、移民申請冷遇、生活保護バッシングなど、日本を覆う差別、敵視、偏見の数々についての寄稿をまとめた安田浩一『愛国という名の亡国』（河出新書、950頁）は日本の病巣を鋭く糾弾する。この国が貧すれば鈍すにならぬよう、しっかりと読み込んでおく価値はある。

④ 小中高と音楽、図工で3ばかりもらった身としては、ゲイダイははなから問題外だった。それはともかくとして、二宮敦人『最後の秘境 東京藝大』（新潮文庫、637頁）は芸大生の生態を追った奇天烈な異色本だ。音楽系、工芸系と絵画系など学生たちの個性的なこと。普通の大学とはまるで違う、奥深さを知る。ならば今年の芸大祭には行ってみようか。（浅野 純次）